

水平方向に平べったい、二次元に近い構造をもち、その存在自体は疑う余地はない。

ここで問題となるのは、大気中の内部重力波・メソスケールの乱れ・高周波の乱れこの三者の相互作用である。これまでの所、理論的にこの問題を扱ったものは殆どない。低周波内部重力波とメソスケールの乱れの間には本質的なちがひがあるのかどうかも明確でない。相互作用の一つの可能性は Phillips や Reiter が今度の会で述べたように、内部波にともなる速度分布が力学的に不安定に行なって高周波の乱れを起す。すなわち内部波の運動エネルギーが CAP のエネルギーの源となることである。この場合はスペクトルの一つの山（メソスケールに対応する）から他の山（CAT に対応する）へ、エネルギーは gap を越えて、一挙に移るのである。もう一つの可能性は内部重力波間の相互作用によってエネルギーが次々と連続的に小さいスケールに移っていき、ついには浮力領域に（もしそれがあれば）まで移っていくことである。いずれにしても、CAT のスケールから

メソスケールまでのスペクトルの測定を、風のシアー及び温度の鉛直傾度の測定と同時にやること、内部波の安定性についてももっとよく研究すること等の必要性が結論された。

紙数が不足したため、Atlas (米), Cermak (米), Waterman (米), Johns (米), Hay (カナダ), Bull (独) その他ソ連側による refractive index の測定、大気の微細構造による電波・音波の屈折・散乱、メソボーズ付近の乱れについては全然ふれられなかった。study session で得られた結論についてのレポートは、近い中に URSI 及び IUGG の機関誌に全文掲載される予定である。またコロキウムの proceedings は親委員会・組織委員会では出さないことに決定していた。しかしこれもホスト側からソ連科学アカデミー出版雑誌の特別号として出版したい旨会期中に申し出があった。結局出席者の中で希望する者はその雑誌に投稿することになったので、それもその中出版される筈である。

理 事 会 だ よ り

第 17 回 (13 期) 常任理事会議事録

月 日：昭和40年10月1日（金）15.30～18.00

場 所：気象庁海上気象部会議室

出席者：畠山、正野、北岡、桜庭、神山、今井、大田、小平、吉野、安藤 各理事（順序不同）

- 議決
1. 日下部評議員が都合で辞任されたので、後任については、全国の理事にはかって決める。
 2. 学会賞選考委員会から本年度の朝日賞には「富士山レーダーの建設における技術開発」を、松永賞には小倉義光会員の「大気乱流の基礎的

研究」を候補として推したいとの報告があったので、これを承認する。ただ朝日賞は、その代表者を気象関係者とすることを要望する。

3. 第4回国際気象電気会議が1968年に日本で開催されるが、これについては雷研究会などを通じて、気象学会にその共催方を要望されている。予算規模その他が不明なので、現段階では当学会として予算措置ができる範囲内で、共催することを一応承認する。